



羽幌町郷土資料館

ニシン漁の時代 炭鉱の時代
など歴史を伝える資料館

羽幌町郷土資料館は、昭和57年(1982年)、当時閉校となっていた築別中学校校舎を利用して開館しましたが、「市街地から遠い」との理由で、平成元年(1989年)に町内の旧裁判所を改築し、移転オープンしました。羽幌町の開拓の歴史、生活の歴史が一目でわかる資料や町内で発掘された貴重な化石類が、約1700点展示されています。

羽幌町は慶長年間から江戸時代にかけて松前藩の場所制度に組み入れられ、漁場や砂金採集を目的に和人が訪れるようになりました。明治に入ると、漁民や農業移住者も集まりだし、人口が急速に増えていきます。明治20年代からニシン漁が始まり、浜からニシンが消える昭和30年代まで、漁業が羽幌の経済を支えていました。昭和14年(1939年)からは羽幌炭鉱が本格的に操業し、ピーク時には1万人を超える労働者が働く炭鉱のまちに成長しましたが、石炭から石油に転換するエネルギー革命に飲み込まれ、昭和45年(1970年)に閉山してしまいます。「羽幌町郷土資料館」ではこうしたニシン漁の時代、炭鉱の時代などの隆盛を伝える資料の数々を展示しています。

また、佐渡の資産家で明治26年(1893年)に羽幌へ移住した本間家が酒造業を営んだ当時の資料や、貴重な生活用品の一部も展示されています。化石関係では、奥羽幌から産出される白亜紀層の化石「アンモナイト」や世界に数例しかない裸子植物「ハボロハナカセキ」、世界的な新種新属として発表されたイルカの化石「ハボロ・フォカエナトヨシマイ」など、学術的に重要な展示品もあります。

見どころ

2階の展示室には町内で採掘されたアンモナイトや動植物の化石が展示されています。「ハボロハナカセキ」は1億年前のものと推定される貴重な花の化石のレプリカで、現物は学術機関に貸し出されていますが、化石に興味がある人には興味深い展示物の一つです。

ポイント

羽幌の地名は、アイヌ語のハブル(柔らかいところ)、ハボロペツ(広大に流れ出る川)によると言われています。旧裁判所を利用した館内は1階と2階に分かれ、希望者は1階の事務室横で、昔の羽幌の映像を視聴することもできます。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



白亜紀以降の地層が分布する羽幌には、状態の良い化石が多数埋蔵していると言われ、学術的に重要な資料となっています。

■基本情報 (R7.3)

住 所：苫前郡羽幌町南町20番地の1
T E L：01646-2-4519
開館期間：5月1日～10月31日
開館時間：10:00～16:00
休 館 日：月曜日(変更される場合があります。)
入 館 料：220円(高校生以下無料)